



08年日本山岳会の課題

2008年(平成20年)
1月号(No. 752)社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

08年日本山岳会の課題	
公益社団法人化推進と首都圏	
ブロックの支部化……………	1
富士山麓で自然保護全国集会開催……………	4
東西南北……………	6
山を愛でた古墳時代の貴人	
サハリンの山旅から	
山の映画『リサ』……………	8
活動報告……………	8
集会委員会/科学委員会/	
資料映像委員会……………	10
支部だより……………	10
関西・京都・東海/広島/宮崎	
図書交換会出品目録……………	12
および購入申込みのご案内……………	12
図書紹介……………	14
会務報告……………	16
ルーム日誌……………	17
会員異動……………	17
図書受入報告……………	17
INFORMATION……………	18
さんけん通信……………	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時

公益社団法人化推進と
首都圏ブロックの支部化

宮下秀樹

新年明けましておめでとうございます。会員の皆さま、よき年を迎えられたこととお慶び申し上げます。年頭に当たり所信を述べます。

課題を2つに絞りました。東京、神奈川、埼玉など首都圏ブロックの細分支部化と、公益社団法人化へ向けての作業です。冒頭から恐縮ですが、残念ながら今のままでは日本山岳会の将来

は明るくありません。とくに半数近い会員が住んでいる東京、神奈川を中心とする首都圏で、活力を失っています。

元気がないと感じる理由は、

会員の多くが山岳会の活動に参加していないことにあるように思います。毎月の会報『山』と、年末に『山岳』を受け取るだけの受身で、自分から動く機会がほとんどない会員が多すぎます。山登りや

山に関わることが好きで、会費を払って山岳会を支えてくださることは感謝しますが、もつと山岳会の活動に参加していただきたいのです。クラブライフを楽しんでいただきたいのです。

こうした首都圏の方々に、山岳会を身近なものに感じてほしいと思います。そのため、実際の活動母体としてのいくつかの支部を立ち上げてはどうかと考えました。企画や全体運営、財務管理、図書、資料、情報発信など、いわゆる本部機能とは別の実働支部です。

これからの日本山岳会

昨年は、毎号のように会報『山』の誌上に会員諸氏から貴重なご提言をいただきました。執行部ではこれを真摯に受けとめ、これから

の活動指針に生かしたいと思っています。

さまざまな提言を整理すると、

問題点は次のようになります。

* バイオニアワーク(の終焉)と日本の登山界の現状。

* 登山文化の継承と人材育成、新しい目標設定。

* 海外登山の変質と山岳会の再生、体質改善。

* 若者不在、高齢化が避けられない組織の将来展望。

* 環境問題と自然保護への取り組み。

* 支部活動のあり方。

* IT時代の情報発信とコミュニケーション。

ほかにもクラブライフの充実、一般登山者への啓発活動、遭難防止などなど、課題が山積みです。

私にとつては、11月号に掲載された東海支部の尾上昇会員による「登山文化の継承と(より広範な)ネイチャークラブへの転進」論には共感を覚えるところが大きでありました。今後の議論を進めるための具体的な活動提案を伴っていました。

支部の活性化と本部の停滞

さて、私はこの10年ほどの間、本部の運営から離れていたのので最近の雰囲気、動向をつかむのに暫く時間がかかりました。

会長就任のとき「出来るだけ早い機会に具体的な目標を設定して、一步一步登っていきいたいと思う」と書きましたが、それから半年あまり、さまざまな集まりに顔を出し、理事や委員会の責任者から話を聞いて感じたのは、ひとつは10年前に比べて各支部の勢いが上がったことであり、反面、本部(東京を中心とする首都圏)の活動が停滞しているということでした。

若い新入会員が少ない今、自分が年齢を重ねるとともに会の平均年齢が上がっていくのはやむを得ないことです。しかし、平均年齢にそう差はないにもかかわらず、

本部・首都圏にはないパワーが地方支部にはあり、活発に動いているという印象を強く受けました。

本部に比べると、将来の展望がなかなか見出せないまま悲観的になるのですが、元気の良い支部の現状を見ると、まだまだやれると思えるのです。元気の源は、地域に密着した山登り、イベント、公益活動、支部員同士のコミュニケーションなどです。実行を伴った活動です。

私なりに本部・首都圏停滞の原因を考えてみました。本部では旧来のしがらみから抜け出せず旧態依然としたところがあります。保守的で枠からはみ出ずまいとする傾向が強く、老齢、老朽化の進行で組織が機能しなくなる。人材が育たず、問題が生じても対策が後手に回る。図体が大きくなりすぎた弊害ではないか。

より小さいグループのなかでこそ、お互いのコミュニケーションが図れ、新しい発想も生まれてくると思うのです。いま、手を打たないと日本山岳会がじり貧になるのは目に見えています。目標や成果が見えるブロックでの活動は、若い人の関心と参加への意欲を誘

うことになると考えます。首都圏でも昨年、栃木、茨城、千葉に支部が誕生しました。活性化への第一歩だと思います。

不公平感解消のために

従来、各地の支部に属していた会員からみると、首都圏に住む会員との間に不公平感がありました。支部は、山岳会の年会費のなかからその加入人数に応じて、一部を助成金として受け取れるものの、かなりの額の支部会費を別に納めて活動しています。ですから、東京に近い人が、支部会費も払わずルームや図書室等の施設が利用できるのは明らかに不公平です。

全国に散らばる会員を惹きつける企画がそう多くあるわけではありませぬ。吸引力は以前よりずっと低下しています。にもかかわらず、本部主導の従来感覚で運営していくことには大いに疑問を感じます。

不公平感は、本部にある各種の委員会活動に対してもあります。必ずしも全国的な視野に立って活動しているとは限らず、首都圏に限定された範囲で活動しているのではないか。そう思えます。



地方支部で盛んな森づくり。写真は宮崎支部の育林作業

公益法人化に活路を

ここで首都圏会員の問題から離れて、もうひとつの課題、公益社団法人化に話を移します。私は現在の「社団法人日本山岳会」が全体として活性化を遂げるきっかけを、平成20年度から実施される公益法人制度改革に求めたいと思います。12月から法律が完全実施され、公益法人としての認定作業が始まります。

会員のための運営、サービスはもちろん従来どおりです。プラス非営利の社会貢献を重視した活動への舵取りです。外圧に便乗する



新会長に選任された総会で挨拶する宮下秀樹氏

ようですが、公益法人化への道を、当会の体質、組織を変える絶好のチャンスと捉えようと思います。

公益社団法人ではなく一般社団法人を選択した場合、税制面での優遇措置の対象外になると、財政が成り立たなくなる恐れが出てきます。会員一人ひとりの会費納入と資産蓄積の努力によって築かれてきた日本山岳会の存立（資産を含む財政基盤）が危うくなります。もちろん、公益社団法人認定への道のりは決して生やさしいものではありません。公益に資するど

のような事業を、誰が、どのように進めていくのか。本部機能と支部活動の調整では当然、支部の地域性と独自性をどう守るかも課題になるでしょう。会計基準の見直しや収支決算の処理も厄介な問題です。認定される法人は極めて少ないと言われています。

どちらの道を選ぶにしても難問だらけです。であれば、将来展望が開ける公益社団法人化という、高いハードルを乗り越える努力をしたというのが私の考えです。

日本山岳会は体質も組織も変わらなければならぬ。いま変わらないうと将来はない、というくらい

の決意で臨みたいと思います。公益法人制度改革の税制はほぼ決まっていますが、その運営指針の詳細は今後半年の間に明らかにするようです。従って今、軽々に結論を出すことは控えたいのですが、詳細が決まり次第、会員の皆さまにご報告して総合的な判断を得ようと考えています。会員諸氏のご理解とご協力をお願いします。

首都圏ブロックの支部化、本部との二重構造で活力を

当会の活性化と深く関わる首都

圏ブロックの支部化に話を戻します。いわゆる首都圏には2400人の会員がいます。去年、支部を結成した千葉など首都圏3支部に加入している会員は3000人余りです。残る東京、神奈川など2100人がひと塊になっても身動きが取れないでしょうし、行政への対応も意識した、きめ細かな公益活動、例えば山岳環境の保全、自然保護、アウトドア教室、技術講習会、各種のシンポジウム等々の活動もままならないと思います。なるべく細分化した支部組織を作る必要があります。

ブロックを分け、核となるリーダーを求めます。多くの有能な人材が野にあることは分かっています。活性化のため力を尽くそうという会員の出現が望まれます。この新鮮な活力が未来を拓いていくものと確信しています。今後執行部で積極的にアプローチします。で、よろしくお願いします。

首都圏の会員が原則として支部に属することによって、日本山岳会は、全国の会員が同時に支部員であるという二重構造に身をおくことになります。この二重構造のもとで、広い視野から登山文化の

継承を考える上部組織と、それらを実行する支部組織ということで役割を分担します。具体的にどうするか、どう振り分けるか、詰めていかなければなりません。大づかみに言うとうろくということですが、山登りと、登山文化の継承・敷衍（ふえん）——双方を守り育てていくためには最善の方法はないかと考えています。早急に首都圏ブロックの細分支部化を検討する委員会を立ち上げたいと思っています。

昭和の時代、長く日本山岳会をリードし、改革の節目に何度となく大きな役割を果たした松方三郎さんは、昭和22年4月、東京支部が発足した際の初代支部長でした。その松方さんが20年後の同42年、東京支部が所期の使命を終えて発展的に解消するという変革に際して次のように言っています。「日本山岳会は、何れともあれ、山を愛する同好の士のクラブだ。だから会員に対して、今年は何をしたらいいか、それを第一に考えなければならぬ」と。

置かれている状況は違っていますが、新年に当たって今、その言葉を噛みしめています。

富士山麓で自然保護全国集会開催

盛会だったテーマ討議と全体集会

07年の全国集会は、11月17日、18日の2日間、富士山麓・西湖で開催された。参加者は、前半の集会のメインである支部報告・テーマ討議に79名、後半の全体集会の参加者および一般参加者を加えると計156名となり、大変盛況であった。

初日は、レイクホテル西湖において、各支部の活動報告、山の環境アンケートの結果報告、テーマ討議に続き、一般公開の全体集会に移り、組曲『三つの地球の歌』、座談会「富士山と私」と盛り沢山のプログラムである。2日目は、バスハイク組も加わって、4グループに分かれてフィールドスタディを行なった。

初日の17日の午前は、宮下秀樹会長の挨拶で開会、最初に各支部の活動状況報告があった。北海道(大千軒岳の高山植物保護活動)、山形(鳥海山その後)、山梨(山岳レインジャー活動)、信濃(山岳地

域へのシカの進出とその影響)、信濃(撤去責任・管理責任)、岐阜(権現の森林づくり)、関西(大台ヶ原の入山規制と利用調整地区の設置)が、それぞれ報告された。その他、東海支部から「支部の活動状況報告」、神崎忠男副会長から「HAT-Jについて」、大森弘一郎氏から「地球温暖化について」等の発言があった。

引き続き、9月に自然保護の関係者を対象に実施された予備調査「山の環境問題に関する意識調査」(アンケート調査)の報告がされた。興味深い結果と貴重な意見が得られた意義深い調査であった。

午後は、「日本山岳会会員として考える山の環境とマナー」をメインテーマとしてのテーマ討議が行なわれた。一昨年の大山でのグループ討議の結果と前述のアンケート調査の結果を受けて、具体的かつ行動に結びつくような議論を期待したものである。

最初に、高山植物部会長(樋口

みな子)、山のトイレ部会長(森武昭)、登山道部会長(宮崎幸博)から、各支部の活動状況報告および今後の方針等の発表があり、環境省・加藤自然保護観察官も参加して、それぞれの分野で具体的活動を積極的にこなしている方々の発言と活動状況の報告もあり、活発かつ有意義な議論が行なわれた。

議論の結論として、今後の活動の方向が確認された。すなわち、広報活動、啓発活動、外部に対しての提言が重要であり、それらを実行するための第一歩として、①JACの一般会員を対象にしたアンケート調査の実施、②「新版マナーノート」の作成に取り組む事が確認された。

引き続き15時30分から行なわれた「全体集会」には、バスで来た支援グループに一般参加の方も加わって賑やかなものとなった。

本邦初演の組曲『三つの地球の歌』を楽しんだのち、座談会「富士山と私」では、松方峰雄(松方三郎氏子息)、小佐野正史(富士山五合目小御獄神社宮司)、渡邊玉枝(登山家)各氏から、近藤信行氏(作家)の司会で、富士山への想いが語られた。パネラーの方々の富士



座談会「富士山と私」のパネラーの方々

山との深い関わりと造詣の深さに感銘を受けた。大変意義深い集会となった。

集会の最後に、会場から「シカの食害調査の実施」についての提言があり、今後具体的に検討することが決定された。

2日目は、4グループに分かれてのフィールドスタディである。週間天気予報が、良いほうに外れて無風快晴の絶好の登山日和に恵まれて、各グループとも、晩秋の富士山を満喫した。何かと行き届かなく、皆さんに迷惑をお掛け



御殿場にある秩父宮記念公園にて

したことをも帳消しにしてくれた
素晴らしい天気にとただ感謝で
ある。

最後に、本集会開催にあたり、

富士山をめぐる自然と文化の旅

07年11月17日7時半、バスは予
定通り新宿駅西口を出発した。富
士山麓・西湖で開催される集会を
支援しようと呼びかけたところ、

大型バスに満席の応募があつて実
現した支援バスツアーである。車
中、前副会長の田邊壽さんから「青

共催いただき、ご協力いただきま
した山梨支部、静岡支部の各位に
対して厚くお礼申し上げます。

(富澤克禮)

春の富士山」の講演を聴く。慶大
山岳部時代の腕白ぶりが彷彿とし
てくるお話だった。

まず到着したのは、御殿場の秩
父宮記念公園。日本山岳会ともゆ
かりの深い宮様が、戦争末期から
戦後にかけて住まれた建物が市
に寄贈され、記念館になっている。
庭先に富士に向かって立つ秩父宮
像(朝倉文夫作)の前で記念撮影
をした。

ひき続きガイドをお願いした若
林和司(山の自然学研究会)さん
の案内を受けながら須走り浅間神
社に参拝、ふじあざみラインを走
って須走り口五合目へと向かう。
雪が降ればその時点で閉鎖すると
聞いて気をもんでいたが、難なく
五合目に到達。雲の上は快晴で、
新雪まぶしい富士山の歓迎に一同
大感激。早速、シニア組を残して
全員が1時間かけて小富士を往復。

残留組は小屋じまい周辺の山荘で、
暖をとりながら一息入れた。

後は、この日のために若林さん
が作成した資料をひも解きながら、
「富士山の自然と文化」についての
懇切丁寧な解説に耳を傾ける。

富士山スカイライン、富士宮道
路を走り、ひたすら西湖へと急ぐ。
会場のレイクホテル西湖に到着し
たのは15時15分。無事、全体集会
に合流することができてほっとし
た。

この旅の目的は、富士山の裾野
を一周しようというものである。
翌18日には、登山組は三国峠か
ら三国山を経て籠坂峠まで歩き、
周遊組は忍野周辺を散策する予定
であった。

バスはまず吉田口浅間神社に寄
つて一日の安全を祈り、山中湖畔
を経て登山口へ。登山組を降ろし
た後、周遊組は役目を終えて吉田
に下ろされた富士山レーダードー
ムを見学。その後、忍野八海を経
て村はずれの音楽喫茶「野薔薇」
でコーヒータイムをとった。

ここは10年前、自然保護委員会
が主催した「富士山憲章制定記念
シンポジウム」のとき、ミニコン
サートを開いた思い出の店。その

とき歌った佐野民枝さんはもうい
ない。ささやかな偲ぶ会ともなっ
て、仲間にとっては感慨深いひと
ときとなった。ここで登山組と合
流。

会員も非会員も交えた参加者は
五十余名。入り組んだスケジュ
ールで思わぬハプニングもあったが、
2日間とも上機嫌で迎えてくれた
富士山のお陰で、全員、満足して
帰路についた。

(緑爽会 近藤 緑)

車でめぐる東チベットと、世界最高所の青蔵鉄道

ナムチャバルワと聖なる湖・
東ヒマラヤ大周遊と青蔵鉄道10日間

発着地 東京・大阪・名古屋・福岡

4/9(水)～4/18(金)……………¥516,000

4/23(水)～5/2(金)……………¥528,000

ALPINE ツアー サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

N 東北 S

山を愛でた古墳時代の貴人

岡澤祐吉

隣家の松の木が霧で見えなくなっている早朝、田んぼ道を歩いた。天気予報は晴れなので、霧が消えれば行く手に雪をかぶった餓鬼岳、さらに鹿島槍、その奥には白馬連峰が見える。振り返れば、北岳や仙丈岳も見える。

いつも歩いている道なのだが、遠くの山ばかりに眼がいつて、傍らに古代遺跡の標示板が立っているのを見落としていた。

平成16年に旧穂高町教育委員会が立てたその標示板によると、この上原古墳は六世紀後半のものだという。これは安曇平の地に海の民、安曇族が住んでいた時代になる。

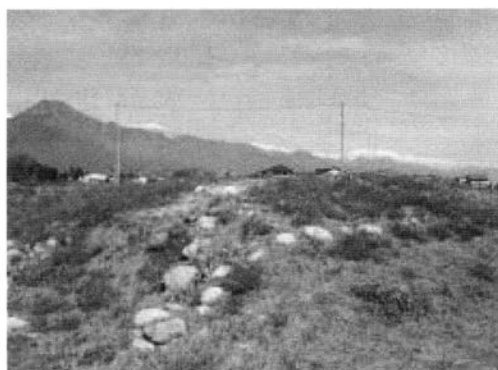
発掘調査の結果、古墳は烏川の

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

氾濫で埋没していた。副葬品には金張り装飾の精巧な馬具、六花形鏡板付クツワや心葉形の杏葉、ヒスイ製の勾玉などがあり、藤ノ木古墳との関連もありそう、被葬者は身分の高い人と推定された。さらにこの古墳だけが群をなさない単独古墳であるため特異な存在だという。

被葬者を特定できない点はこの古墳も同じらしく、この古墳も例外ではない。素人判断ではあるがこのころ住んでいた安曇族が海人と関わりを持ったり、安曇宿禰が膳部奉膳だった点などから大海人皇子や、長屋王の息子で父王に殉じた膳部王の名も思い浮かぶ。これらの人と直接関係はないとしても、被葬者が大和朝廷と関わりのある人物だと考えることは可能なのだろうである。

被葬者が誰かより、現在の北アルプスの山並みを見ることのでき



安曇平にある上原古墳

ない西山山麓の古墳群から独り離れ、洪水に見舞われるかもしれない低地に自分の墳墓を求めた貴人がいたことを、山好きの一人として見過ごすわけにいかない。

1300年ほど前の覇権争いとは無縁なこの場所に、愛馬とともに立ち、連なる山並みに目をやっただろうその人の骨さえ地に帰って、ほとんど残っていないという。そんなことを知ると、その人には自然回帰の強い意志があったといった確信のようなものも湧いてくるのである。

サハリンの山旅から

新妻 徹

日本の最北端「宗谷岬」の北方にサハリン島クリリオン岬(西能登呂)が見える。この宗谷海峡は約40キロであり、約2万年前の最終氷河期には陸続きであったという。日本山岳会の中央分水嶺踏査の延長線上であり、40年間ではあったが南樺太は日本領土の歴史があり、入国許可される山域に行ってみたりと思っていた。

日本ロシア協会の「平和の船」が、稚内から出港することを聞き、芽室町の助田夫妻と07年8月20日から参加した。目的の突阻山(6822m)はサハリンの最も細い部分の東海岸に位置し、ユジノサハリンスク(豊原)から車で約3時間の静かな山城であった。

故郷訪問団のスケジュールに合わせて同行したので、時間的に登頂はできなかった。しかし、豊富な高山植物に驚き、南前衛峰と命名したピークのコマクサ群落を満喫した。このピークから眺めると西の方に中央分水嶺の樹林帯が南

北に延びている。夏道はないので、積雪期にスキーかスノーシューで踏査できないだろうか……。熊やブヨの出ない冬期が良いだろうか同行してくれる山岳会があるだろうか……。多くの未知の課題をクリアして登頂するのが登山の本質であろう。

だが、ロシア領となった南樺太の中央分水嶺にアプローチするために、検討せねばならない心の問題がある。昭和20年8月の終戦で、沖縄と同じ辛い苦しい自決をしなければならなかった事例が、札幌の道庁赤レンガ館サハリン資料室に展示されている。

今回の訪問団のなかに、中学生のお孫さんを本州からつれて参加した高齢者がおられた。戦後60年で風化されそうになっている悲しい体験を、後世に継承しなければという気持ちであろう。

短い夏のサハリン行であったが、樺太へ鎮魂の旅を続けたいと心に深く誓うものがあつた。



山の映画『リサ』

鈴木正規

突然、余命は残り少ないと知らされた時、人はどのように対処するのだろうか。登山を趣味とする人なら、怒り、悩み、苦しんだ末に、再び山に向かうのだろうか。話題のベルギー映画『リサ』は、絶望の末に山に向かう話である。

主人公リサは、ベルギーでクラブを経営し、アート・ディレクターとして活躍する有能な女性だ。趣味はクライミングで、夢はマッターホルンに登頂すること。詳しくは紹介されていないが、一般ルートのヘルンリ稜ではなく北壁を設定しているようだ。

映画の冒頭は、リサと親友のサードがマッターホルンに挑むシーンで始まる。空撮などを交えてピラミダルなマッターホルンが描写され、山好きにはたまらない景觀が眼前に展開する。しかし、サードは壁の迫力に負けて登頂を断念。予定より早く帰宅したりサは、同棲中の恋人の裏切りを知る。失望したりサは、怒りのままに高

層ホテルの外壁をよじ登り、警察官に追われる。

この時、逃げ込んだのはホテルの18階の部屋。そこにはピアノ・コンクールに出場するために若者・サムが滞在していた。内向的なサムは自由に生きるリサに、リサは理性的なサムに惹かれ、2人は恋に落ちる。サムは人工壁でクライミングの手解きを受け、初めて足を踏み入れたクラブに驚く。

コンクール優勝を願う母親から反対されながらも、サムは順調に勝ち進み、2人は愛を育みながら希望に満ちた日々を送る。そこに

かつての恋人ロブが現われ、エイズウイルスに感染していることをリサに告げる。リサ自身の検査結果も「ポジティブ」だった。悩みに悩んで絶望の末にリサは、サムに事実を告白し、姿を消した。自分の命をかけた夢、マッターホルンの単独登頂に向かうために……。最後のマッターホルン登攀シーンは、吹雪のアイガー北壁で撮影されたというが、臨場感が強く伝わってくる。ホテル外壁のクライミングなどは、登山者が見ても十分に楽しめる。本格的な山岳映画である。

百名山の知られざる魅力を一挙公開。

朝日ビジュアルシリーズ
深田久弥『日本百名山』から

最新版

全ページ完全新編集

日本百名山

【全50冊】
(1号で20山を紹介)

創刊号、好評発売中!

新企画

毎号付録
線じ込み

「携帯登山マップ」

毎週木曜日発売 創刊号サービス定価 400円(税込)

創刊号は2週売り、2号(1/31発売)以降は毎週発売
A4判変型・オールカラー・36ページ(創刊号は46ページ) [2号以降] 定価580円(税込)
※輸送事情により一部地域の発売日が異なります。

お求めは書店、ASA(朝日新聞販売所)でどうぞ。
出版案内ホームページ <http://opendoors.asahi.com/>

朝日新聞社

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集會委員会

晩餐会記念懇親山行

2年ぶりに集會委員会の主催で行なった。07年は関東では一般登山者にポピュラーな山、丹沢・大山(1252m)である。74名の参加者があった。

12月2日9時30分、小田急線伊勢原駅に集合。バス、ケーブルカーを乗り継ぎ、下社に到着。1時間30分程の登りで大山阿武利神社奥の院に到着。季節外れの暖かさ、参加者は途中で1枚、2枚と着衣を脱ぎながら、最後の紅葉を楽しみつつの登山となった。

本来、山頂からは眼下に相模平野、江ノ島、三浦半島、遠くに房総半島を眺められるのだが(11時頃までは晴れていたようだ)、多くの方々が山頂に到着する頃にはガスが発生し、残念ながら視界はなかった。



大山山頂を埋めつくした参加者たち

頂上では、ヤビツ峠から先行した豚汁部隊が準備した熱々の豚汁を楽しんでいた。昼食後、全員での記念撮影、解散となった。下山は、仲間同士それぞれのルートで下山していただいた。多くの会員の方にご参加いただき、ありがとうございました。

(下河辺史郎)

科学委員会

講演会「日本の氷河地形を巡る研究の歴史」

07年11月15日、本会104号室において、小嶺尚委員による講演が行なわれた。参加者は25名であった。演者による研究史上の新たな指摘や、実際の氷河地形の調査経験などを交えた聞き応えのある内容となった。

問題の発端となったのは、ライマン、ナウマン、ミルンら明治政府のお雇い外国人による意見で、それらは氷河地形の有無よりも、当時ヨーロッパで氷河堆積物であることが明らかになった迷子石や漂礫粘土層(ドリフト)と同じものが日本にあるのか、という点にあった。1902年には山崎直方が白馬岳で氷河地形を発見し、「氷河果たして本邦に存在せざりしか」と題する論文を発表したが、このタイトルはそれら外国人の記述への反論の意味があるのではと踏み込んだ指摘がなされた。

これ以降、日本人による氷河地形研究が開始され、辻村太郎と小島鳥水による氷河地形の存否論争もあったが、当時は日本の氷河地

形の情報の多くが登山家によって提出され、次第に各地の氷河地形が明らかになってきたことが解説された。少々奇妙な点としては、ウェストンが在日中に日本の氷河問題についてほとんど語らず、帰国後ヨーロッパ留学中の大関久五郎の英文論文を読んで、突然否定論を展開している。演者が記録を時系列に並べてみたところ、学者(山崎、辻村、大関)が研究を発表すると、登山家(小島、ウェストン)がそれを否定する、ということとを繰り返していることが分かったという。

戦後の研究は氷河が拡大した時期である氷期論へと発展し、橋本誠二らによる日高山脈での複数の氷期の提唱、小林国夫らによる中央アルプスのモレーンの年代決定へと進み、第四紀という地球史の中に位置づけられるようになる。その後、横尾岩小屋を氷河最拡大期のモレーンと認め、空中写真判読という新しい手法によって日本アルプス・日高山脈の氷河地形分布図(山と氷河の図譜に掲載)を作成した五百澤智也の業績も紹介された。

こうして新たに見出された氷河

地形の例として、演者らが調査した白馬尻・猿倉周辺のモレーンとその堆積物が鮮明な写真で示された。さらに、長く疑問視されていた谷川岳東面の氷河地形についても、演者らによってモレーンが確認された。モレーンは氷河拡大範囲を示す証拠となるが、行くことそのものが困難な山や谷でそれを見出すことは並大抵ではないので、山岳会会員諸氏からの情報を大いに期待したい旨が強調された。

(清水長正)

資料映像委員会

講演会DVDの完成と
支部配布のお知らせ

DVD (5枚セット) 完成の報告

03年から05年にかけて行なった連続講演会「語り継ぐ黎明期の登山……それぞれの山」5回シリーズのDVDが完成。講演会は、日本山岳会創立100周年を記念し、当委員会が企画・実施。その後、2年をかけて編集・DVD化を行なった。さらに、各50分内に編集し、活用しやすくしたもの。

製作の意図は、①東京で実施された講演会を支部にも提供、②登

山文化継承の一環、③本部の委員会活動を支部にも反映し相乗作用に繋げたい、などである。

支部への無料配布について

希望の支部へ、1セットを送料着払いで無料配布する。2セット以上は、実費(1セット1500円)で受け付ける。希望の支部は、①2月20日迄に②数量③責任者名と送付先を明記して申し込む。発送は3月中旬を予定。非売品、複写禁止。今後、委員会や同好会への貸し出しも検討していく。

講演会の内容

第1回、堀田弥一「山に生きて94年・立山からヒマラヤへ」(03年10月開催)。大正デモクラシーに育まれた登山、日本人として初のヒマラヤ遠征を行なった話を中心。貴重なナンダ・コート登頂シーンの動画も挿入した(『山』703号に報告)。

第2回、渡辺兵力「山への想い、山に残した足音」(04年4月開催、05年9月逝去)。山やスキーとの出会いを回想。園に衣着せぬ語りで、登山の屁理屈や独自の登山考にも触れている(『山』708号に報告)。

第3回、坂倉登喜子「女が山に登る時・花への思いを馳せて」(04

年10月開催)。女が山に登ることなど、法度な時代の苦労話と、花追いの旅への夢が中心(『山』715号に報告参照)。

第4回、村山雅美「穂高からマナスルへ、そして南極へ」(05年4月開催、06年11月逝去)。旧制松本高校時代、第1次・第2次マナスル隊でのエピソードを豪快に語っている(『山』722号参照)。

第5回、松丸秀夫「山日記から見えてくる日本山岳会」(05年11月開催)。赤い表紙でお馴染みの「山日記」その創刊号に見るアルピニズム、そして失われていくアルピ

ニズム。50輯の「山日記」から日本山岳会を検証・解説している(『山』728号に報告)。

このDVDの製作・複写・配付にあたり、関係者各位よりご協力を、理事会より特別予算の承認をいただき実現できた。ここに、お礼と共に報告させていただく次第である。

*申込・問合せは資料映像委員会の奈良千佐子まで

(FAX) 03-3402-6014

✉ mchisako@mbc.nifty.com

(奈良千佐子)

新刊 ◎京の秘境・芦生の森ガイドの決定版! ◎

由良川源流 芦生原生林生物誌

渡辺弘之 著 / A5判 / 184頁 / 予価2100円(2月20日刊行予定)

由良川の源流にひろがる京都の秘境・芦生の森に生育する動物・昆虫・植物などを、四十有余年にわたり観察・調査・研究してきた著者が、貴重な写真をまじえて現況を紹介し、原生林の保全と保護を訴える。芦生研究林元林長による待望のガイドブック。

◎すべての登山者にぜひとも読んでいただきたい。

北アルプス

大日岳の事故と事件

斎藤惇生 編 / A5判 / 190頁 / 1995円

大日岳の雪庇崩落事故がなぜ事件になったのか。法曹界から事件の核心にせまり、雪氷学者が巨大雪庇の構造を明らかにする。リーダー必読書!!

〒606-8161京都市左区
一乗寺木ノ本町15

ナカニシヤ出版

Tel. 075-723-0111
Fax. 075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示価格は税込]

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

関西・京都・東海支部

第11回森の勉強会

「伊勢神宮の森」報告

07年11月10・11日、伊勢市神宮会館及び神宮宮域林にて開催。参加者24名。10日の座学は、①京都大学生態学研究センター准教授・酒井章子氏による「森林の生態—生物が創り出す熱帯雨林の季節」。②森林インストラクター・川合寿之氏による「神宮宮域林常緑広葉樹の観察ポイント」。③神宮司片林学博士・木村政生氏による「神宮宮域林の概要及び内宮神域の森林観察」であった。

①の酒井氏による講演は、ボルネオ熱帯林で不規則に1〜5年に1度、フタバガキ科の植物を中心にも多種の植物が一斉に開花する現象を解説したものである。研究のフィールドは、ボルネオ島マレーシアのランビル国立公園で、私た

ちの「第九〜十回森の勉強会」で見学した場所である(関連の報告は「山」736号を参照)。

②の川合氏による「神宮宮域林常緑広葉樹の観察ポイント」は、前2回の宮域林での勉強会と事前調査で撮影した豊富なスライドを駆使して行なわれ、翌日のフィールドスタディに大いに役立った。

③の木村政生博士による講演は、まず、フィールドスタディの場所になる宮域林の植生の概要を説明後、内宮に向かい、一般参拝ルートから見える神域林の樹木について、神宮にまつわる興味深い話を交えて説明された。

11日、フィールドスタディ。それぞれ12名の2班に分かれ7時30分に車で出発。8時、磯部谷出合に到着後、急峻な磯部尾根に取り付く。周りは一面の常緑広葉樹林であった。「樹木の名前を覚える方法として、何か理由をつけて覚え

ていくのがよい。食べられるのか、美味しいか、初めて見たかなど、1日に1つ覚えれば1年で365種は身につける事が出来る」と川合氏が説明してくれる。

尾根の左側のヒノキの人工林は、林床は湿性なのかウラボシが多い。ツバキ科のヒメシヤラはなぜか尾根筋に多く、何らかの要因で太平洋岸から来て棲みついたのだろうが、判然としていない。マツ科で対生枝を持つ毛無しのモミは高度1500m位まで生育し高く伸びるが、材木としては硬くて用途は棺桶くらい。それ以上の高度では、入れ替って毛のあるウラボシモミが生育する」との事も理解できた。

また、ツバキ科のヒメシヤラとナツツバキの関係や、モチツツジの逞しい姿とボケツツジとを比較した説明も楽しい。

11時に京路山に立つ。天気もよくなり、宮域林の全域を眺望する事が出来た。日当りの良い岩場には濃緑のヒトツバ、岩の下には赤い実を付けたヤブコウジも見られた。下りは、少し県道を下って再び林内に入る。育ちきったマメ科のヤマフジが太木に絡み痛めつけている姿、海岸に近いせいかミミ

ズバイも多い。モミ・タブの太木などは高く樹冠も見えず葉形が確認できない。

14時30分、磯部谷出合で解散。

(東海支部 小川務、黒田滋)

広島支部

創立10周年記念式典開催

07年11月3日、広島城近くの八丁堀シャントに70名が集まり、支部創立10周年記念式典を行なった。歴史と伝統のある先輩支部に比べるとたかが10年である。式典の冒頭でこの6月に亡くなった種村前支部長ほか6名の故人に黙祷を捧げると、先輩諸氏の優れた統率力のおかげで創立時29名の会員が93名に増えた現況に感謝の気持ち湧く。事業でいえば宮島支部懇南極フォーラム、分水嶺踏査などが思い浮かぶが、いずれも会員の結束があつてこそ成しえた。

当日はゲスト14名にお越しいただいた。吉永常務理事から会長代行の挨拶を、神崎副会長から「世界の登山界と日本山岳会として支部の役割」の講演をいただいた。京都支部から広島支部の産みの親とも言える斎藤顧問、関西から重



広島支部創立10周年を祝って70名が集まった

廣支部長、山陰から高田支部長ほか3名、福岡から中山支部長、東海から橋村副支部長ほか1名にも参加いただいた。

式典に花を添えたのが記念登山隊による中国四川省霸王山(5551m)初登頂の報告だった。10月3日、崩落の音やまぬ垂直の壁を攀じ登り、19時30分登頂。山頂直下でビバークをしたのち下山した名越實・松島宏・吉村千春会員に拍手が鳴りやまなかった。

祝賀会は、創立記念・初登頂に加え、本片山永年会員の米寿祝い、牟田会員の中国文化賞受賞決定も加わって大いに賑わいを見せた。

お開きになると翌日の記念登山、

芸北八幡高原に向けてチャーターバスが出発。1時間半で斎会員の山荘に到着。そこで2次会を楽しんであと近くの紺野会員の山荘にも分宿して、長い1日を終えた。

11月4日は快晴の記念登山日。

参加者30名が西中国山地の秘境部と言える聖湖畔から高岳に登り島根県の奥見峠までの10kmを歩く。ここは分水嶺踏査をきっかけに古い登山道を復活させた記念のコースで、当日に備えて今秋2回ほど草刈りを行なった。紅葉の彩りの中を爽快な気分が進む。昼食時には橋村・猿投の森代表による緑陰講座も開かれた。14時、全員無事に到着。解散式のあと引き揚げた。多くの皆さんのおかげで10周年記念日を祝うことができた。

(国枝忠幹)

宮崎支部

第23回宮崎ウェストン祭と南北交流登山

第23回ウェストン祭は、今秋1番の冷え込みとなった07年11月3日、高千穂町五ヶ所三秀台で開かれた。今回は、新妻前北海道支部長と、故・大谷前宮崎支部長同士の

の悲願であった南北交流登山が7月に北海道の地で実現したことから、北海道支部の前・現両支部長以下11名の参加を得て意義深いものとなった。

前夜祭は三秀台下の五ヶ所野菜集出荷場で、田原地区村おこし推進協議会主催により行なわれた。会場では、登山者の安全と自然の恵みに感謝する神事の後、神楽・子ども神楽・大太鼓演奏が奉納され、合唱やダンスなども披露された。特に、焼酎を竹筒で沸かして飲むカッポ酒は北の岳友には珍し

いらしく、注ぐ時に出る音に興味津々であった。

その後、宿泊所の公民館に場所



宮崎ウェストン碑に集う4支部の岳友

を移し、北海道支部と九州3支部(北九州、熊本、宮崎)の総勢65名が膝をつき合せて焼酎と地元の手料理に舌鼓を打ちながら、山談義に講じ楽しい交流会となった。

翌日の式典は参加者120名、五ヶ所小学校児童による点鐘で始まった。続いて黙祷、児童による献花、高千穂町町長挨拶などがあり、最後は「ウェストン祭の歌」を全員で合唱し万歳三唱で終了した。児童数の減少が危惧される中、児童の参加がある限りウェストン師の人間愛は後世に引き継がれていくものと信じていた。式典終了後、記念登山として紅葉の映えるなか、北谷登山口から祖母山へ登った。

11月4日、えびの高原韓国登山口から霧島縦走を行なった。この日の霧島は、心ならずも見事な紅葉を創出しており、北の岳友にも堪能していただけたと思う。会話の中には南北の違いがわかるようなムードもあり、楽しい交流登山となった。

南北交流会は今、産声をあげたばかりである。同じ会員として、今後さらに交流を深めていくことを誓って、宮崎での第1回南北交流登山は幕を閉じた。(田村哲朗)

106	安曇野の蝶	田淵行男	講談社	S58 カバー 著者署名あり	1000
107	日本地理大系―山岳篇	冠松次郎・田部重治・武田久吉・小島鳥水・他	改造社	S 5 箱	2000
108	日本アルプスと氷期の氷河	今村学郎	岩波書店	S15 箱	800
109	上越の山	日本登高会 / 編	三省堂	S12	500
115	白馬一昭和36年度冬山合宿遭難捜索報告	東京教育大学山岳部	徳久球雄	S38	500
116	南アルプス	白旗史朗	朝日新聞社	S45 カバー 箱	1500
117	北アルプス黎明	穂苅三寿雄	信濃毎日新聞社	2002 カバー	1000
131	日本アルプス縦断記	一戸直蔵・河東碧梧桐・長谷川如是閑	大鐘閣	T 7 3 版	1000
132	山行記	田島勝太郎	昭文堂	T15 箱	1000
133	破片岩	冠松次郎	耕進社	S 9 3 版 箱	800
134	立山群峯	冠松次郎	第一書房	S 4	800
135	大峰山脈と其溪谷	中川秀次・富川清太郎	朋文堂	S 9 箱	1000
137	スイス日記	辻村伊助	思索社	1949	500
145	白神山地	江川正幸	青森銀行	H 5 箱 カバー	500
147	山と溪谷	田部重治	第一書房	S 4 箱	1500
148	ヒマラヤーその探検と登山の歴史	ケニス・メイスン / 著 田辺主計・望月達夫 / 訳	白水社	1957 箱	1000
149	アンナプルナ南壁	クリス・ボニンソン / 著 山崎安治 / 訳	白水社	1972 箱	500
150	エヴェレスト日記	ジョン・D・マッカラム / 著 青柳健 / 訳	二見書房	S42 箱	500
154	リュックサック XII 1966—1982	早稲田大学山岳部		S58	500
170	世界山岳名著全集・別刊 登山百年史	A・ラン / 著 馬場勝嘉・諏訪多栄蔵 / 訳	あかね書房	1967 箱	500
177	ランタン・リルン—7246 m	大阪市立大学山岳会		S38 箱	500
183	エヴェレスト登頂	ジョン・ハント / 著	朝日新聞社	S29 カバー 蔵書印あり	500
196	忘れえぬ山旅	田部重治	三笠書房	1969 新装版 箱	500
197	日本アルプスの登山と探検	ウォルター・ウェストン / 著 黒岩健 / 訳	大江出版社	1982 箱	500
198	穂高の岩場 1	岩後会	朋文堂	S34 箱	500
199	山道具が語る日本登山史	布川欣一	山と溪谷社	1991 カバー	500
200	アルプスと人	松方三郎	岡書院	S23 カバー	1000
201	遊牧論 その他	今西錦司	秋田屋	S23 カバー 記名あり	1000
203	深田久弥 山の文庫 1～6	深田久弥	朝日新聞社	S57 1刷 カバー 文庫本	1500
Y1	FARTHEST NORTH (Vol.1・2・MAPSの3冊)	FRIDYJOF NANSEN	HARPER & BROTHERS PUBLISHERS, NEWYORK AND LONDON	1897 箱	5000
Y2	THREE YEARS IN TIBET	EKAI KAWAGUCHI	BOOK FAITH INDIA, Delhi	1995 カバー	2000
Y3	HIMALAYAN JOURNALS	J.D HOOKER	TODAY & TOMORROW'S, NEW DELHI	1987 4th カバー	1000
Y4	TIBET- PAST AND PRESENT	Charles Bell	BOOK FAITH INDIA, Delhi	1998	500
Y5	THE PEOPLE OF TIBET	Charles Bell	BOOK FAITH INDIA, Delhi	1998	500
Y6	RELIGION OF TIBET	Charles Bell	MOTILAL BANARSIDASS PUBLISHERS, DELHI	1994	500
Y7	ROUND KANGCHENJUNGA	D.W. FRESHFIELD	PATNA PASTAK BHANDAR, KATHMANDU	1979	500
Y8	THE ROOF OF THE WORLD	Mohamed Amin	Camerapix Publishers International, NAIROBI	1989 カバー	300
Y9	EVEREST South West Face	Chris Bonington	Hodder & Stoughton, LONDON	1973 カバー	500
Y10	KANCHENJUNGA	Narinder Kumar	Vision Book, NEW DELHI	1978 カバー	300
Y11	ON TOP OF THE WORLD-An Illustrated History of Mountain Climbing	Showell Styles	THE MACMILLAN, NEW YORK	1967 カバー	500
Y12	From the Ocean to the Sky	Edmund Hillary	THE VIKING PRESS, New York	1979 カバー	300
Y13	The Faber ATLAS	D.J.Sinclair	GE, London	1970 5th	300
Y14	THE MOUNTAIN WORLD 1954	Swiss foundation for alpine research	ALLEN AND UNWIN, London	1954	300
Y15	THE MOUNTAIN WORLD 1955	Swiss foundation for alpine research	ALLEN AND UNWIN, London	1955	300
Y16	THE MOUNTAIN WORLD 1956/57	Swiss foundation for alpine research	ALLEN AND UNWIN, London	1957	300
Y17	THE MOUNTAIN WORLD 1958/59	Swiss foundation for alpine research	ALLEN AND UNWIN, London	1958	300
Y18	THE MOUNTAIN WORLD 1960/61	Swiss foundation for alpine research	ALLEN AND UNWIN, London	1961	300
Y19	THE MOUNTAIN WORLD 1962/63	Swiss foundation for alpine research	ALLEN AND UNWIN, London	1964	300
Y20	THE MOUNTAIN WORLD 1964/65	Swiss foundation for alpine research	ALLEN AND UNWIN, London	1966	300

- 記名、線引き、若干の汚れはご容赦ください。
- 頒布価格が500円未満の和書は掲載を省略しています。全目録はホームページ (図書委員会) から検索できます。また、必要な方には郵便でお送りします。
- 問合せは、図書委員会・三好まき子まで ☎ (090-8019-8601) ✉ (hirata@hon-s.co.jp)

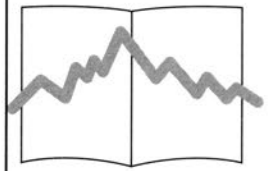
図書交換会出品目録および購入申込みのご案内

「図書交換会」を、3月1日(土)に開催します。多くの会員の参加をお待ちします。

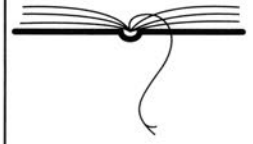
交換会当日の詳細は18ページの「インフォメーション」に掲載していますが、当日に来場できない方は、下記の要領で購入の申し込みを行なってください。

- 郵便(日本山岳会・図書委員会あて)またはメール(hirata@hon-s.co.jp)で、2月15日までに申し込みください。
- 購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。
- 入札本(★印)の場合も、入札価格を記入のうえ、同じ要領でお申し込みください。
- 希望が重複した図書は、当日に抽選で決定します。(来場できない方の抽選は、図書委員が代理します)
- 購入図書の送料は購入者負担とし、交換会終了後に代金と一緒に請求させていただきます。

番号	書名	著者名	発行		価格
★入札本	新西域記 上・下(2冊)	大谷家蔵版 上原芳太郎/編	有光社	S12 箱 大型本 大谷光瑞の署名あり	★最低価格10 万円から入札
11	チベット	フオスコ・マライニ	春鳥会	S17	3000
12	ヒマラヤ	内田良平	時事通信社	1993 2刷 カバー	1000
13	ヒマラヤ画集	山川勇一郎	山と溪谷社	1959	2000
14	ネパールの旅 スケッチ集	木崎甲子郎	木崎甲子郎教授退官記念会	1990 箱 800部限定564	2000
15	森林・草原・氷河	加藤泰安	茗溪堂	1966 箱 カバー	1000
16	山岳 森林 生態学	加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫/編	中央公論社	S54 再版 箱	1000
17	山岳省察	今西錦司	弘文堂	S15	1500
19	チョゴリザ登頂	桑原武夫	文藝春秋新社	S34 カバー	500
20	ヒマラヤ紀行	J.D. フーカー/著 薬師義美/訳	白水社	1979 箱	2000
21	現代の冒険2—悲劇の山 栄光の山	深田久弥/責任編集	文藝春秋新社	S45 箱	500
22	ヒマラヤ—その探検と登山の歴史	ケニス・メイスン/著 田辺主計・望月達夫/訳	白水社	1975 2版 箱	1000
23	遙かな山やま	泉靖一	新潮社	S46 箱	1000
25	ネパールの高地にて	ノーマン・ハーディー/著 神原達・牧野登/訳	朋文堂	S35 カバー	1000
26	続・ユーラシア文明の旅	加藤九祚	加藤九祚	1991 カバー	500
28	氷河と岩と森の国—パタゴニア調査隊の記録	北大パタゴニア計画委員会/編	北大図書刊行会	1974 箱	500
29	北の溪谷	丹征昭/編	あうる舎	S49 箱	500
39	山と書物 正・続(2冊)	小林義正	築地書館	S38 箱	7000
41	ハイランド	辻村伊助	大修館書店	S50 箱 復刻本	800
42	黒部谿谷	冠松次郎	大修館書店	S50 箱 復刻本	800
43	剋岳に逃げる人びと	東京帝国大学山の会/編	大修館書店	S53 箱 復刻本	800
44	アルプス記	松方三郎	龍星閣	S49 箱 新版	3000
45	日翳の山 ひなたの山	上田哲農	朋文堂	S33 箱	5000
46	山に忘れたパイプ	藤島敏男	茗溪堂	1970 箱	1500
47	白い城砦	芳野満彦	あかね書房	1970 箱	1000
48	生きた、還った—8000m峰14座完登	ラインホルト・メスナー/著 横川文雄/訳	東京新聞出版局	1987 カバー 著者署名あり	1500
49	白頭山—写真集	岩橋崇至	S B B	1993 箱	1500
50	マウンテンワールド	吉永定雄/訳	同朋舎出版	1993 カバー	1000
51	エヴェレスト—その人間的記録	W・ノイス/著 浦松佐美太郎/訳	文藝春秋新社	S31 3版	500
52	山の時刻	田淵行男	朝日新聞社	S42 カバー	8000
53	山の繪本	尾崎喜八	朋文堂	S13 普及版 記名あり	700
54	山の繪本	尾崎喜八	朋文堂	S17 再版	500
55	雲と草原	尾崎喜八	朋文堂	S18 4版	500
56	山に描く	足立源一郎	古今書院	S25 箱	2000
57	山に忘れたパイプ	藤島敏男	茗溪堂	1970 箱	1000
58	越後の山旅	藤島玄	富士波出版社	S35	1000
59	嵐の中の子供	羽生操	藤巻書房	S23 中村清太郎装幀挿絵	500
91	穂高は生きている	神憲明	じゃこめてい出版	1985 2刷 カバー 著者署名あり	500
97	山と溪谷	田部重治	第一書房	S 6 9版 箱	1000
99	山岳遍歴	深田久弥	番町書房	S42 カバー 著者署名あり	500
100	山頂山麓	深田久弥	青木書店	S17 箱	1000
102	遠い山近い山	望月達夫	茗溪堂	1968 箱	500
105	雪線	船越好文	白水社	1958 4版 箱	1000



図書紹介



A・F・ママリー・著

海津正彦・訳

『アルプス・コーカサス登攀記』



2007年10月
東京新聞出版局刊
A 5判 357頁
定価 2500円

は「あとがき」で明らかにしている。

それは、まずもってママリーがアルプスの「黄金期」に続く「銀の時代」の代表者だったこと、そして、クライミングの独創性が失われはじめていたアルプスに飽き足らず、新たな可能性を求めて、当時としては遠くコーカサスにまで駆り立てられていったチャレンジ精神の持ち主だったことをあげる。訳者はさらに敷衍して「いつの時代でも、世の中の流れが変わる時には、いろいろな考え方がぶつかり合い、実践にあたってはあれこれ迷いも多かっただろう。本書のそんな部分は、クライミングが多様化してあれこれ迷いの多い現代のクライマーが読んでも、ヒントになるところが少なくない」と書くことによって、現在のクライミング・シーンを取り巻く問題状況を的確に区分けしている。この翻

訳を支えているのはそうした状況認識だろうし、それに応え得る内容をママリーの書が備えていると考えたからだ。

ママリーの文章は、時には刺を含む独特のユーモアをただよわせ、術学的な文飾を随所にほどこした、きわめて凝った文体となっているため、実際、いざ訳そうとするとたやすくはない。前訳者の石氏もずいぶん苦労しているが、今回の海津氏は、現代のクライミング状況に焦点を当てることで翻訳の意図を明確化させ、用語・訳語の選択にもそうした意図が充分反映されていると思われる。そのことが、この訳文を読むことに、ある種の心地よさ、腑に落ちる感覚を与えてくれている。

また、巻頭のJ・A・ホブスンによる「ママリー頌」は、今回新たに訳出されたものだ。

装幀にも触れておきたい。カバーも魅力的だが、ぜひその下の本体もみてほしい。実に端正な作りになっていて、本を手にとる喜びがおのずと湧き上がってくるだろう。

(飯田年穂)

『自然のメッセージを聴く 静かな大地からの伝言』

小野有五・著



2007年12月
北海道新聞社刊
四六判 306頁
定価 1680円

私が小野有五さん(北大大学院教授)と出会ってから十数年になる。「北海道の森と川を語る会」や北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会や知里幸恵記念館を作る運動、千歳川放水路問題、サンル川にダムを作らせない運動など、さまざまな市民運動の先頭に小野さんの姿がある。東京生まれの小野さんは、1986年に北海道に移り、日本で最もよく自然が残っているはずの地で自然が破壊されていく様子を身近に見て自然保護をめざした活動を始めたという。本書は北海道民医連新聞に2年間連載したエッセー「自然のまなざし」に新たな書き下ろしを加えたエッセーである。

テーマは多岐にわたっているが、特にアイヌのこと、サンルダムの問題に多くの紙面を割いている。

サンル川をダム開発から守り、サクラマスが遡上する川として後世に残すこと、アイヌ民族の奪われた権利を回復し、完全な平等を実現することは、この10年来の著者の夢であり続けたという。

第1章「母なる地球と向き合う」には、地球の危機はすでに私たちの生命や日常生活を脅かしていること。自然のメッセージは、隠されていて、すぐには聴き取れない。自然の声を聴くことを学びたいと語る。

第2章「アイヌモシリに生きる」には、若い命と引き替えに「アイヌ神謡集」を残した知里幸恵記念館をつくる運動や、アイヌの歴史や文化の見直し、平等実現についての道筋についての論考を収めている。

第3章「サンル川にダムは必要か」は、自然科学者としての面目躍如の章である。何が何でもダムを造るために開発局がつく嘘の数々。御用学者たちの傲慢さを心がはりさけるような想いで科学的に論破している。

第4章「自然のまなざし」には、詩のような魂の言葉の数々が続く。「私たちはみんな、自然のなかを

循環するもの、自然のかすかな息吹にすぎない。せめてつかのまの時間、めいめいがめいめいにしかできないことをやっていきたい」。五感をときずまして聴く生きもののたちの声、大地からの語りかけが胸にしみわたっていくのを覚えた。

(樋口みな子)

斎藤惇生・編

『北アルプス大日岳の事故と事件』



北アルプス
大日岳の事故と事件
2007年9月 出版
ナカニシヤ 1905
A5判 1995円
定価

旧・文部省登山研修所(文登研)主催の大学山岳部リーダー冬山研修会。2000年3月5日、その研修会中に事故は起きた。当時、最大規模の雪庇が崩壊し、その上で休憩していた2名の研修生が亡くなったのである。

本書は、事故当時の文登研の研修内容から裁判にいたるまで、そしてそもそもの原因となった雪庇について詳しく解説されている。当日の雪庇崩落事故の模様、業務上過失致死罪に問われた原因、山

岳事故における法的責任、そして大日岳の巨大雪庇にまで、順に項目が立てられている。

この事故は、講師2名が業務上過失致死で書類送検されたが、結果として不起訴で解決している。

当時の文登研の研修内容も詳細に載っていて、まず雪崩についての講習、そして弱層テストもしっかり行なっていた事実が述べられている。主任講師である山本一夫氏は、「すべて自分の責任である」と話しているが、どこまで雪庇を予見できるものなのだろうか。集団登山でリーダーは、どこまで危険性に対して責任を負わなければならないものなのだろうか。

今回の事故の焦点となったのが、巨大雪庇である。当時、考えられていた雪庇とは大きくて12メートル程度のものでしかなかった。また場合によっては雪庇は崩れないもの、吹き溜まりは雪洞を作りやすいとまで考えられていた。しかし、崩壊した雪庇の大きさは30メートルを超えていたという。弱層である「しもざらめ雪」が一番下に積もっており、その弱層が上に積もった雪の重さでまず崩れた。そのため、上に乗っていた雪庇に急激な方張り

の力がかかり、雪庇が崩れたと本書は述べている。また、この「しもざらめ雪」の予見ができればよかったのだが、深さは7メートル。通常、弱層テストは70〜120センチ程度で行なわれるだけに、このような巨大雪庇の予見は非常に難しいと思われる。

裁判では前述の通り、崩壊した雪庇が過去最大規模のため予見することは不可能という見地から不起訴という結果となった。亡くなられた2名の研修生はもちろん、遺族の方がた、さらに講師の方たちの無念はいかばかりなものであろう。本書は、当時の講師たちの心境、そして事故に対しての想いも書かれている。なによりも、このような不幸な事故を2度と起こさないためにも、正確な雪庇の知識と雪の積もり方について学習しておく必要があると思う。

最後に。このような不幸な事故があつたために、文登研の冬山研修会が中止されたままである。最近、雪崩による遭難事故も多い。2度とこのような事故を起こさないためにも、冬山の講習会が再開されることを願うばかりである。

(大橋彰人)

会務報告

平成19年度第8回(12月度)理事会
日時 19年12月12日 18時30分

21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】宮下会長、鰐坂・神崎各副会長、吉永・宮崎・成川各常務理事、斎藤・藤井・石橋・古野・太田・堀井・相馬各理事、深川・竹中各監事、日下田・河野・近藤各常任評議員・神長会報編集委員長

【委任】岡部・山川両理事

【審議事項】

1・「海外登山奨励金」選考委員の委嘱について：(社)日本山岳協会「海外登山奨励金」制度を制定したことに伴う選考委員1名の委嘱に協力依頼、神崎副会長に依頼する。

(承認)

2・「山岳」掲載写真の使用承認願

い：中信森林管理署

第6年3号(明治44年刊)掲載

の白馬岳の写真を植生回復事業の評価のため。

(承認)

3・山岳資料写真撮影許可願：東映株式会社

映画「剣岳 点の記」で使用するため図書室所蔵の山岳図書の背

表紙の写真撮影

(承認)

4・写真撮影許可願：株式会社帝国データバンク

城数馬氏の肖像写真を帝国データバンク史料館の図録兼ガイドブックに掲載

(承認)

【報告事項】

1・上ホロカメットク山雪崩遭難事故概要報告、「お別れの会」報告：北海道支部

12月8日「お別れの会」が催され宮下会長、鰐坂・神崎両副会長が出席。遭難した4家族十数人と約100名の方が参列した

2・H A J 華甲望年会の案内：日本ヒマラヤ協会

3・望年会の案内：日本勤労者山岳連盟

12月14日、神崎副会長出席予定
4・「上高地山研」年末年始宿泊の案内：山研運営委員会

12月29日、平成20年1月4日の間冬季メンテナンスをかねて臨時開所

5・新春懇談会：(社)日本山岳協会

1月19日開催、神崎副会長出席
予定

6・平成19年度第1回3支部(栃木・茨城・千葉)懇談会案内：栃木支部

平成20年2月2日(土)～3日(日)、日光湯元温泉で開催

7・ヒマラヤンクラブ創立80周年記念会議と祝賀会案内：ヒマラヤンクラブ本部

平成20年3月14日(金)・15日(土)、ニューデリーにて開催。平成20年2月17日(日)、ムンバイ地域祝賀会開催。会長代理として中村保会員が出席予定

8・平成19年度指導者連絡協議会(コンソーシアム岡山)開催についての案内：文部科学省スポーツ・青少年局長

12月22日(土)岡山市にて開催

ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



9・「生涯スポーツコンベンション2008」の開催についての案内：文部科学省スポーツ・青少年局長
2月15日(金)広島市にて開催
10・日中韓学生交流登山(吉永・相馬)

9月に行われた韓国山岳会創立記念行事の折、宮下会長が提案し中国・韓国の賛同を得た学生交流登山が実施に向け準備がすすめられている。国際交流・学生登山の振興などを目的に「第1回日中韓学生交流登山2008」として各国10名程度の参加で、2月21日(木)

(28日)白馬岳梅池周辺で開催する予定

11・会報「山」12月号編集報告(神長)

12・「山岳」102号編集報告(成川)

13・寄付金5万円(吉永)
会員(匿名)より自然保護委員会あて寄付があった

14・講習会(無料)のお知らせ:
東京都山岳連盟共済管理委員会

1月6日、国立オリンピック記念青少年総合センター

15・平成20年度公認スポーツ指導者(山岳)養成講習会」の案内:

(社)東京都山岳連盟指導者教育委員会

16・救急救命の講習会の報告(古野)

12月8日、プラザエフ13時~17時、38名の参加

議題の後、フリートークとして首都圏の支部化が話題となり、全

会員が支部に所属し組織を細分化することによる活性化、「分水嶺踏

査」効果、学生部の問題、各地の森作りなどを含む多岐にわたる問

題が討議された。

17・12月度入会者1名
(2月号に掲載)

ル ーム 日 誌 12月

1日 支部長会議

3日 総務委員会

4日 図書委員会 九五会

5日 常務理事会 集会委員会

6日 山岳地理クラブ 101会

10日 学生会

11日 アルパインスキークラブ

12日 アルパインスケッチクラブ

13日 01会

15日 理事会 図書委員会

17日 フォトビデオクラブ 緑爽

18日 会 山の自然学研究会

19日 ゆきわり会

20日 総務委員会 資料映像委員会 101会

26日 山研運営委員会 アルパイ

27日 スキークラブ 00会

28日 三水会 集会委員会 つく

29日 も会

30日 科学委員会 指導委員会

31日 山遊会 公益社団法人化

プロジェクトチーム検討

会

インターネット小委員会

自然保護委員会 麗山会

12月来室者472名

会 員 異 動 (12月)

物故
長富修吉 (3624) 07・10・31

退会
赤星輝満 (8791) 東九州

松井忠治 (9359) 福岡

村岡由貴夫 (9630) 福岡

清水芳彦 (9872) 岐阜

池田 澄 (12665)

中島篤巳 (13980) 京都

終身会員
山田硅二 (5992)



図書受入報告 (2007年12月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
樋口清作	平賀文男ノート——南アルプスの先駆者	189pp/19cm	白山書房	2007	著者寄贈
松竹事業部(編)	玉木宏 as 落合信一郎 (映画「ミッドナイトイーグル」パンフレット別冊)	/22cm	松竹事業部	2007	山川陽一氏寄贈
細井勝	遭難者を救助せよ!	262pp/20cm	P H P 研究所	2007	出版社寄贈
風間嘉隆	詩集 山から帰る日	134pp/20cm	白山書房	2007	出版社寄贈
田部井淳子	山からの贈り物	188pp/19cm	角川学芸出版	2007	出版社寄贈
八重野充弘	埋蔵金伝説を歩く——ボクはトレジャーハンター	188pp/19cm	角川学芸出版	2007	出版社寄贈
熊倉彰(編)	わらじの仲間創立50周年記念誌 第I巻 わらじ	438pp/22cm	わらじの仲間	2007	発行者寄贈
熊倉彰(編)	わらじの仲間創立50周年記念誌 第II巻 飯豊	474pp/22cm	わらじの仲間	2007	発行者寄贈
白鳳会(編)	白鳳 第8号——白鳳会創立80周年記念	236pp/26cm	白鳳会	2007	発行者寄贈
山崎幸和(編)	写真でみる高頭祭のあゆみ——第50回高頭翁寿像碑前祭	64pp/21cm	日本山岳会越後支部	2007	発行者寄贈
埼玉県山岳連盟(編)	ヒマラヤへ——埼玉県山岳連盟海外登山委員会10年の記録	250pp/30cm	埼玉県山岳連盟海外登山(委)	2007	発行者寄贈
日本雪崩ネットワーク(訳)	雪崩ハンドブック	342pp/26cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
Matsumoto, M. & Kano, T. (eds)	Geology of the Panxi Region, Sichuan Province, Southwest China	340pp/27cm	Yamaguchi Univ.	1986	編者寄贈

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第25回図書交換会

図書委員会

昨年に続き、本年も図書交換会を開催します。山岳古書の世界を堪能ください(出品目録は12・13ページに掲載)。

日時 3月1日(土)14時より購入申込み・抽選を開始します(13時から本の内覧ができます)。開始時間に遅れないようご注意ください。

場所 山岳会集會室
問合 三好まき子 TEL 090-8019-8601

✉ hirat@hon-s.co.jp

◆講演会のご案内

千葉支部(自然保護委員会後援)

日本アルプスとカルパチア山脈は、ほぼ同じ高さで、ともにハイマツ帯があり、氷河地形が発達していますが氷河はない、など似た点が多く見られます。しかし氷河

地形やハイマツ帯の規模は大変違います。両山地の山岳景観を比較しながら、その違いが生まれた原因を考えます。

日時 3月11日(火)18時30より
場所 日本山岳会104号室
演題 「日本アルプスとカルパチア山脈の山岳景観の比較」

講師 小崎尚会員
申込 豊倉さと子 TEL 047-1229041

✉ ig210121-2712@tbp-t.com.ne.jp

◆山スキーヤーのための雪崩講習会 アルバインスキークラブ

山スキーヤー向けの雪崩原理とセルフレスキューの基礎講習を昨年に引き続き実施します。講師は日本雪崩ネットワークから招聘。

日時 2月2日(土)〜3日(日)
場所 梅池周辺(宿泊は八方山麓)
費用 概算3万5000円
問合・申込 松澤節夫 TEL 042-

✉ setsuomatsuzawa@nifty.com

62315666

◆田辺寿さん「山のスケッチ展」

喜寿を迎えた田辺寿さんの「登りたい心で描いた山のスケッチ展」。

会期 2月17日(日)〜23日(土)

10時〜19時(初日は2時から、最終日は17時まで)

会場 東京交通会館地下1F「エメラルドルーム」 TEL 03-3214-4288

内容 奥多摩、ヒマラヤ、アルプスなど50点

*先月号のこの欄でお知らせしたアルパインスケッチクラブの

「ヒマラヤ環境調査トレッキング」と「講演会」のお知らせ

自然保護委員会・科学委員会

地球温暖化の影響で氷河湖の拡大が加速しています。昨年、慶応大学福井研究室では、エヴェレスト・ローツェ山麓に広がるイムジャ氷河湖に監視カメラを設置し、インターネットを通して日本から常時監視できる環境を構築してきました。日本山岳会では、今年同研究室が現地を再訪する時期に合わせて、環境調査トレッキング隊を送ることになりましたので、ふるってご参加ください。

期間 4月23日から18日間

募集 20名

(詳細はHP・チラシ等で後報)

福井弘道教授講演会

「地球温暖化とヒマラヤ氷河湖の拡大—イムジャ氷河湖のリアルタイムモニタリング計画」

日時 2月2日(土) 13時

場所 日本山岳会集會室

参加 先着50名

問合 山川陽一 (TEL 042-374-7165)

「山好きの山の絵展」と同じ東京交通会館で同時期開催。

青海チベット鉄道とカライス内院展望ハイキング16日間
5/20発 ¥685,000



Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

●さんけん通信●

冬期臨時管理人の奮闘記

山研委員 坂本正智

12月29日(時々小雪) 朝9時にオープンする松本駅前のスーパーストアに間に合わせるべく、早朝に東京を発つ。先に出発していたO理事、S会員と駐車場で合流し、3時間近くかけて、1週間、延べ70名分の食材等を買いつける。前もって準備しておいたものと合わせると、段ボール箱で13個。それに個人装備を加えると、2台のステーションワゴン車の後部座席を倒して満杯となった。釜トンネル入口で長野県警山岳警備隊の検問を受けて、いざ上高地へ向かう。

トンネルを抜けると、雨でグシャグシャの雪道。大正池手前で1台は限界。もう1台の4WDでなんとか河童橋までたどり着く。荷を下ろし、再び残してきた車へ。荷を取りに戻っている間、1人は山研までのボッカ。積雪30~40センチくらい。1時間以上かかって車が戻り、橋のたもととは再び荷の山。O理事は車を置きにトンネルまで下り、今度は2人でボッカする。O理事が戻り、すべての荷を山研内に運び込んだのは、ボッカ開始3時間後の午後8時過ぎであった。

12月30日(終日雪) 冬期オープン初日。雪囲いの一部をはずし、建物内の整理。治山道から玄関(地下資料室入口)まで除雪。終わると今度は寝具の用意。やることは山ほどもある。今日は私たちのほかに7名が山研入り。

12月31日(風雪) 今夜の宿泊は18名。あるグループが少々酒を飲み過ぎ、注意した同宿者と大声で口論。そのため年末恒例の「サヨナラパ

ーティ」を急遽中止。使用禁止の男子トイレを使われるなど最悪の事態となってしまった。

2008年元日(雪) お屠蘇、おせち料理、そして博多風「ぶり雑煮」で、ささやかに新しい年を祝う。明神の穂高神社奥宮に初詣する人、雪のなかを散策する人など、それぞれが正月の上高地を楽しんでいた。昨夜の一件で夕食に用意したせっかくの「エゾ鹿料理」もいまいち盛り上がり。臨時管理人「ガックリ」。

1月2日(雪、夕方に少しだけ青空のぞく)

1月3日(雪) 最後の夜は8名。ライトアップされたテラスには雪が盛り上がっている。

1月4日(雪も止み、青空のぞく) 全員で施設内を掃除。再び雪囲いして、きれいにラッセルされた道を、大きな荷を担いで上高地を後にする。多少のトラブルはあったが、参加者全員が無事に下山。これが冬期臨時管理人への何よりの疲労回復剤となる。

多少の反対意見もあったが、会員懇親の場として年末年始のオープンを始めてから6回目の正月も無事終えた。

炊事ひとつを例にとってみても、通常の山研とは比べられないくらい労力と時間が必要だ。費用もかかる。それでもあえてオープンに踏み切ったのは、各委員会を含め会員に新しい山研利用を考えてもらいたかったから。

利用者は単独か、配偶者が一緒であったり、JACの行事に参加したこともない会員が多かった。その人たちがここで仲間となって行動を共にしている。食事時間も和気あいあいに、自分たちだけでなく、宿泊者全員で楽しんでいる。これが年末年始オープンの、私たち委員会全員のねらいであった。

「楽しかった。来年のお正月も山研で会いましょう」と約束して下山していく会員の声を聞きたくて、来年もオープンする予定である。

◆編集後記◆

●08年ももう20日ですが、今年もどうぞよろしくお願いいたします。少しでも会員みなさんが楽しみにしてくれるような会報作りを目指したいと思います。

●年頭の抱負を宮下会長に綴っていただきました。特に公益社団法人化の推進と首都圏ブロック化への動きが、今年の課題とのことです。乗り越えなくてはならない難しい問題も多いかもしれませんが、随時、この会報でお知らせしていくつもりです。

●巻末に「さんけん通信」の番外編を山研委員の坂本正智氏にお願いしました。急な依頼で期限に間に合うかちょっとドキドキしましたが、正月に開所する大変さや喜びが伝わってくるような温かい文章となりました。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 752号

2008年(平成20年)1月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社